俳諧七部集

河庭野
附負外

七

文研
911.308
H15
7

911.308
H15
7

中村(俊)

[illegible]

曠野集 員外

誰か蕉をわかもちさらぬ出と紙か
市中にあるとて朝のくしきに成
又舞に東四明の麓より
きて花のころハこ紙をんとす
ちりて佐川田喜ハのよしの山
あさあくといへるこのをと実
さうんす又
琴喰し屋とゝいへとけり紙か
此句尾陽の野名にて作れて
芭蕉翁の傳へしをなをさり

45-5107

笑しにけいつ此田野へ居をうつして
実に世の我感ありしあまた
きまる人の中に虎の物語をし
とうに進ちまたる人あまたく
独色を我変しらるよし諸の
相ふへうこさあるを左のことし
様を変て實に下ること壱の
あることといへるも實の字老の
杜乃こころあるをや形屋の
身我志るひて

素堂

麦をわ事我等無まお目我ぬ屋なし

早稲田大学大学院
文学研究科図書

~~4715~~

この文人乃るすつこの楽しく
とけ〳〵我しをこ人聞き
家友も叫して

まをさしかさすのまゝ我かけ御ぬ　野水
鎌の頭もしをろまものまて　荷今
ものしかなるわたし采う利　越人
門我石身待園のやまうひり　水
風の月利をかゝ秋乃雲　今

武士乃鷹うつ山も霞を通し　人
志をりこついて潮の鳴るを　水
袋ゝ見経と見出家のうへ　今
津ふと降ら紙くる法むくる　人
志久見松明直き法花乃鶴　水
千匂をなむ小山ゆらゝ　今
姫さみら一夕桜も咲除りゝ　人
あてをもなきタ月夜の那　水

霧の身を涯の世にある相世日　今
秋我なを明く盗人乃妻　人
明るやら西も東も鐘乃声　水
さふうふ見る利根の川舟　今
冬の日新てかくとして加き雲　人
承子すけと羽織うち見て　水
ふらくとき乃姫の市の場へ　今
狐つきとや人のえるしゝ　人

柏木の脚気の比のつくしと　水
さくやくとのこゑ笑えつる　今
月乃新らしき合こなり辻お濃　人
秋こなほら事墨乃酒桶　水
高しく純貴の物に出る蓋をて　今
これしとものぬ石破乃茶作　人
かしこまる諫に涙こほあらし　水
史箸はらはしきくものあつきと　今

きくすきの見をとゝ人のこゑを　人
あせきとまてく池乃かへとす　水
むさの事都もいまこゑくす　今
擇らく表ぬるをまかれなり案　人
墨ろ史を正月をにわを終て　水
大根ささこくテよいそかしし　今

遠洲や浪に志気さす蝋と李
はる此舟ゐる酒のなさ星　荷今
のときしやあらは泊に荷を解て　昌碧
百足乃懼る葉さきは今来に　野水
夕月の雲は白浩をうら詠　舟泉
夜寒の蓑を裾に引き珍　釣雪

蘋乃聲とことも志らぬ所そや　筆
一駄るして見ても古綿　龜洞
そこの名をまた蓋しる宮祢ゝ麻　荷今
来すれば此ゆゑ年　宋　昌碧
いくつともなくてめつらに藏造　釣雪
湯殿まいりのもなむこれ也　舟泉
涼しやと延きてくる川の端　野水
こゝかされしゆゑ　月　荷今

秋風す女車の髮おとこ　龜洞
袖そ寄りて湿娥まち法輪　釣雪
時しまものさへてきぬものあ　昌碧
いまも山吹あしたちなるへし　野水
日乃いてやはふそ何をん腹す　舟泉
山やまけす　土をゝぬあまま　龜洞
向まて寝やるほとの小ふほにて　荷今
垢離かく人の是ものの殺まぬ　昌碧

配所にて千萬の外減ぬえて　釣雪
三のうらふさるあメのあそく　舟泉
むく起るあいひつきて亦脇也　野水
門をるけり　荻子よひこむ　荷今
いまとみて足怪町の藪添し　亀洞
お母はあ遠ぬるとこれもこる田瓜　釣雪
ふ里も力あふちのもの下戸ぬ月　昌碧
やゝまつ秋乃やゝあふりなほ　野水

つきくもお母のこゆる寮の窓　舟泉
あ志おもゆ紀安房乃小湊　亀洞
夏の日やみるるゝ泥の照はて　荷今
桶のかつらぬ入しまひけり　昌碧
人なきに脇ぬさして切より　釣雪
ついらつるに落る精進　野水

貧しさ銀うきけり春の雨　舟泉

柳のうしろ孫かまさり乃御　松芳

夕霧深ねとまくこえくるしん　文

きふしきやうに見ゆる月新　荷兮

秋草のとくもなき徑咲くるれ　松芳

弓ひきゐくる勝相模とく　舟泉

ふも赤もの拾はむとこゝろ出る　荷兮
ゑみ乃しく砂の中　砂木のさし　冬文
火鼠の皮砂高成　屋ゑきらく　舟泉
涙見残しやこゝろ笑はつ　松芳
高こゝろ楽鴻もつしてそ落はなる　冬文
酒の半て膳をちてゑ川　荷兮
米年を順礼もをすにおしき　松芳
とまて双母の砂綾を先にゑる　舟泉

なまるもうち志を見こゝるむの皇　荷兮
月のたほろやゑ多井乃夏　冬文
灯にまゝ成れ日ひつてまちの風　舟泉
珠珠をとのもつて脇息のうへ　松芳
隆辰も入歯てまゝの志ハかるて　冬文
十日のさくなれしなるし　荷兮
山星の秋ゑつしと生鰯　松芳
も持かふらくゝへるやゝさむ　舟泉

さふくとあるの紙を隔る月の氣　荷今
馬乃とを紙てるのいあらく　冬文
さひしさて垂井の宿のあ此雨　舟泉
莚ぬまへく蕎麦あふつゝ申　松芳
つくくと綿ゝるものくとましく　冬文
曉ぬのく提婆品　とゝむ　荷今
けしの花とあをすゝるく　せあよまり　松芳
味噌するなれの隣さハりし　舟泉

黄昏乃門さまとけは薪分　荷今
沈牙くよあてゝかになる　冬文
春秋紀赤貝をきてあるく兒　舟泉
靜見こもとるなら旅ゝら　松芳
こさけらなや瀑をかひよ　おをこそて　冬文
おとら面白ふ山口の家　荷今

荷今

かとくきす待ぬ心のおもあと

雨の力の紫こさてる戸の口　野水

引捨し車ハ琵琶のかたぎこて　同

あらさう那くも人のうらかい　荷今

月の秋蔵乃きさこ出るや　同

一荷にあひし雨後乃きくらす　野水

初あらしまつせの寮の坊主は　水
菜畑ぬむ肌をたたきとかせたる　今
土肥を多くこかきよせらく　仝
下判おとす紬そおりけり　水
通行のついまとこけて迎かへと　仝
六位のあるし意のうハきさ　今
代まいとこやもくと清れひと　仝
銭一貫こ經一　帯し　水

月乃新蔦はきくゝ舞　仝
茶咲に梨といまゆるなり　今
天仙蓼し冷食あさしを新蔦　仝
う者かゝ過うけらく着經の中　水
たく人となる梨ゝて見物うけとと　仝
夕せましき何ついてやる　今
駒のやを此日を信濃さ八甲斐　水
秋のあらしく昔降臨　今

先てゝこゝもよそ御まさし生見皈　水
八日乃月のまさしきやいるまさく　兮
山乃鶴ゝ松と桃とのかすゝ家都　水
きはさゝぬまさくしくとする　兮
異さ日や服のまさゝ引張ひ　仝
太皷たゝ紀ゝ階子乃あるゝ　水
こゝろ〳〵やゝ家ゝる木賃の艸枕　兮
元たゝのゝさゝ御年さあしる　水

悲ふとも志ゝぬ都まて一三年　仝
庇をつきて住居かゝ見ゆ　兮
三方のあむつしやゝまゝゝる　仝
供奉乃艸鞋を谷へたきこみ　水
従しやゝ小塩大原嵯峨のむ　仝
人れひまいはるの川岸　筆

月さしのほるゑしこハ昼の日ちさもあくなり
おもしろさうに柄をさしてくるくとゝ見
周ゆく宗鑑法師乃勾をすむしあまた
文の書は疵とりのなり我を師をやますつゝぬ

月を柄をさしてくるくとゝ見周ゆく
蚊のおるはうを文とゝ東野梅　越人
とりくるゝ我誰か垂かへてこゝろふん　傘下
おもひかゝ所をうゝ婦さのそら　同
まゝ木柱つゝ松さへくとりかゝる　人
使の者より返るまゝ書　同

あ然こ紀と猫の子を選るさましは　筆
とし豈くるまでしあほうしなり　下
とこてやうの節えさしおもな　同
まゝおもしけれ泣ちうす　のお　人
大勝乃人は法華をこあさ然く　同
月さらゆて鶴親縄う　津　下
唸ふ梯も又くふかさも皆深し　同
秋乃ぎしき此細みる　まり　人

ワのまゝにいつか此世を宵くへき　同
寝なのう書か文字ゆかむ戸　下
花の賀にこゝへのゆる波蔵　同
其もの糊ゆこもきまくの様　人
うち翔く浦の笠屋の塔にくを　同
内へはいりてなゆかゆる　大　下
酔さまのあゆこき此る然也　同
ゐくさほうな涙雨乃降出し　人

歌あはせ掲古鐘首おいくるく　同
まゝ献立のこゝ風ちの日まゝ松栗　下
灯其外油こほして押がくし　同
白をたこせてきりしまゝ　人
ぬく風こゝ恵のこゝろくたのふかしを　同
半をこゝちす　鱗もやり乃秋　下
むつくと月こゝる親の親を御　同
人の詩こゝそゝ御りをもなし　人

にきハしく瓜や貰やを荷ひ也　下
干を添ゑこのこゝ御ふ町　中　人
わかくゝ也小詩の宿れ是時ら　下
皆同音ゑ　こゝ　佛　人
百万もこゝるひ所ら也とら書　下
四楽を御らくさのら御しき　人

深川の夜　越人

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人

酒しゐならふこの比の月　芭蕉

藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝

理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人

瓢箪の大きさ五石ぐらゐや　仝

風にふかれて帰る市人　芭蕉

なくなるも長安の是名利の地　仝
醫の相屋きゝ見くるあし　越人
いそうしと師走乃白くこゝあく　芭蕉
鶴とも世話やく寺の詩とかり　越人
此里に古き[illegible]　芭蕉
足駄ちのを地雨乃あけ深の　越人
きぬしやあるとかきくあるかり　芭蕉
こう[illegible]ひきたもふ芭乃うつくし　越人

手もつの家昏の先膳をすへ見ぬ　芭蕉
物いそくさき舟路大かり季　越人
月とは比良のうるれを小にて　芭蕉
市く萑さゝつるころ此肌ぬき　越人
破[illegible]の行うち付添者の末　仝
人をハさひしき麥みひきハ見　蕉
家にくて服袋にはくむ十寸鏡　人
そのおもひゐる神子みものいひ　蕉

人去ていまた此 聖 乃白ひ々る　人
弥[illegible]に籠る堂とち片隅　蕉
本とさしに嵐のあるく冷さ　人
頃稲のさし事露ちこ深秋とく　蕉
あやにくに妹ふ妹ゝ夕あり矣　人
何のあしたかなみさつてむせ　蕉
行月[illegible]に[illegible]に　人
[illegible]も遠く鐵すいねふり　蕉

秋の田をかゝせぬ[illegible]もひきく　人
さいしゝ[illegible]文字問こゝる　蕉
いゝ[illegible]しく風庇とち木葉屋　人
[illegible]乃[illegible]ひあき　蕉
[illegible]の比[illegible]義[illegible]やはし　人
田[illegible]をくふく腥きくち　蕉

翁と伴なる姉くまゝるへの
まつりし　なりし　具角

落息て荷兮跡文也天津戸
三枝さの月見雲なかりを李　越人
蘭萩の庭さるゝ成川つゝて　仝
飲てけるあらくいふたてあるる　角
唯うまて裾さうけたる夏衣　仝
歯をさしてはへあつまのうは　人

恐らる間まゐるとて御りく　人
静御前に舞をすゝむる　角
空蟬の雛魂乃紙の花をつゝ　仝
あとなかるゝ金二万　人
いとをしさ子と他人ともえ付きこり　仝
やけとかをして見しつゝまゐれ　角
間襲さ耳につきてるさそを　仝
魚をもつゝぬ月の白紙舟　人

そもいろの富士に陸前に秋の紙　仝
なめくけしてる草乃一瓶　角
饅頭をそ紙しさ紙に包みなる　仝
うさ世につゝて死ぬ人ハ損　人
西王母東方朝も同にハえす　仝
よし也鸚鵡の舌乃しかき　角
あらさなやそれさまるく衣の妻　仝
恋の親ともあらぬ夜のまん　人

や、わかひ寝をしおく神す　仝
茅つく青き師しきなりけり　角
夕鶴宿のまさき服乃さ津　仝
いくりの笠を荷ふ強力　人
穴いちに塵うちはらひ草枕　仝
ひいなかさりて伊勢の八朝　角
満月に不断櫻を詠えもや　仝
念者法師さく秋のあきの様　人

夕まくれまさくらゆしき母の子　仝
弓ちらひ為る実あきのまと　角
ほそさりし食の猿字恒　仝
そのきてとりぬ鳥士の園と見　人
なのもまあけつき脇ことりや　仝
むしろ敷へき嘆續乃　仝

嵐雪

あまたらし秋酒ハ人の醒雲紀

秋うれて寒しいつも陽嫁　越人

月の宿書をうちすゆるねて　仝

お面茶の草ひけさけり　雪

きゐあひて牧さましらぬ　里のる　仝

川越うれて城下のうち　人

疱瘡息の透とをとるなと歯の　人
唱ふのを志らす壱なそりなる　雪
あらくみるもあれしのうきなき　同
後そひよへやいふのたるもあき　越
とあるとも油あをするおもぬすき　人
行鵜ちるとかへる浪　人　嵐
見地を碪さうてと一川　脱　雪
明日は髪そるや月の月影　越

志らすの乃群ゝ浪ある女ある　人
つきなの醫者乃後姿や　雪
ちるむすり目もくるれとも蟲　越
こしふてあるとも何をいふらん　人

野水

神雲やことしのひさる桐の末に
月のみしうきゆくの朝起　落梧
山川や鵜の喰ものをさうすれん　仝
鵜を遠かしんるへかをりを　野水
杉母ぶさま押合月に草臥つ　同
あしくとしくしもち櫃ゆら萩　落梧

川越乃歩まさ[illegible]り穐の雨　水
れふを痛くする秋のさとなさ　梧
ひかせてをわりなくかくす縁の下　水
すくきゆふ比のうすしとひ　梧
更る夜の湯をむつりしとあ飲こく　水
とそくり起す相俗々俗　梧
峯の松あちあたりを見おたり　水
猿を起うちのん寄羅さ　梧

京さ玉子なまの夜まこも一文さ　水
下戸を皆いく月のおかろき　梧
耳や歯やくしても茶殺なす　水
夕足ゑさ殘さきふの初午　梧
いひやうも寄る宇ぬ無おたん　同
山伏俗て人志か添なりあ　水
くりくしとくさひぬきたる茶車　梧
桃灯るて御園さ夕ゝ桃　水

何事を語まむ髪を振おほひ　梧
きゝく物もいと妙なきさ　水
まつりしとのやうる馬まかさのせらく　梧
うゝふ荷中を鈴鳴ゆるとり　水
雨せゝてこまれちきるく面白や　梧
柳ちるのゝ例の莚道　水
新なりく月てさゝ秋五十間　同
寂しき秋我女まゝ居るまり　梧

占を上まく知さるゝしやまし　水
禾山とくてまゝやまいけしくの酒　仝
然るの干魚備るゝ川垣さ　梧
誰らアむ我とへ見てゝ海　同
まゝ乘乃くしうゝ峠さえす酒　水
ねゝかもてゝ絵へと雲雀鳴や　梧

一井

一里 [illegible]

かきひの支 [illegible] 氷る 朝　嵐弾

さきくけや正木をりて後ふる　胡及

肩きぬまつも酒にとふ人　長虹

夕月 [illegible] 入きたり早き 掃くきハ　嵐弾

たりに鄉をつかへてむ 秋　一井

里深く踊あり二三目　長虹
玄同が妻になれら飛ぶ　胡及
問ハ飛ぶくも涙より掴の云あく化　一井
葛籠とくさて切なとく文　嵐弾
うとく出寝起なのに湯を（とうす）　胡及
なとゆく東羊の越新雪鋤　長虹
なくるよりよくあひてハうち鶴は　嵐弾
蛤と足をこゝ女中也　一井

浦風に脛吹まくる月濃し　長虹
みるもかしこ化紀伴の風魂屋　胡及
弟者乃さし矢射てなる蔦の隈　一井
蒜くゝ姫香に遠さうとハり　嵐弾
はるのこ飛あときくも騒る人　胡及
氏の子乃綿乃裾に落て　長虹
もかしまる内もさいくまを波　嵐弾
座敷なとある蚊屋を釣まり　一井

木もさゝにあるうしなり松の枝　長虹
釋にかゝる人しく乃眞　胡及
此年になるまで多の縁もなき　一井
淡くりもせきこつい雁入月　嵐彈
蓋るゝ障子の隙跡うそ寒き　胡及
こきゝるやうにきほむ荘の文　長虹
淡き極入道の家のちのあるに　嵐彈
衣引かゝる人の見　音　一井

毒なりと瓜一き純も吟ぬと　長虹
片風ゐちてゝる雲　白雨　胡及
板屋まで端所なき庭の内　一井
ちしの結ぬきるまき庵丸　嵐彈
ぬくしやう日足の志純ぬ智雲　長虹
見わたすかとゝまかつしと　胡及

寛政七年乙卯春三月再刻

皇都書林

筒井庄兵衛
中川藤四郎
野田治兵衛
梓行

芭蕉翁
俳諧七部集續編

沖川卯辰集 首傳海延並正
韻 [illegible] 芭蕉庵小文庫 [illegible]

小刻全部二冊出來